

第73回 九州地方放送教育研究大会 熊本大会
第20回 熊本県小・中学校情報教育研究大会 熊本市大会

主題

持続可能な社会を創り出す 児童・生徒の育成

生涯にわたる学びを支えるメディアの活用を通して

報告書

【日時】 令和7年11月21日（金）

【会場】 授業会場 中央公民館／熊本城彩苑／国際交流会館
全体会会場 国際交流会館ホール

【日程】 午前の部 10:00～12:00 公開授業
午後の部 13:20～16:00 全体会

【主催】 九州地方放送教育研究協議会 熊本県放送教育研究協議会
熊本県小・中学校情報教育研究会 NHK熊本放送局

【共催】 全国放送教育研究会連盟 一般財団法人NHK財団

【後援】 文部科学省 こども家庭庁
熊本県教育委員会 熊本市教育委員会

参加者数：127名

全体会 開会行事



全体会 開会行事



九放協会長挨拶



NHK熊本放送



主催代表挨拶



退任役員表彰

NHKプレゼンテーション



NHKコンテンツ制作局
チーフプロデューサー
白井 健大氏

NHK for School 編集長であり、NHKコンテンツ制作局第一制作センター チーフプロデューサーの白井健大氏より、番組制作の考え方と、制作者が願う番組活用について紹介があった。番組制作で最も大切にしているのは、子どもたちの心を動かし、興味・関心を引き出すことである。

思わず「気になる」「調べてみたい」と感じる演出を通して、問いに向かう意欲を高め、自然と見方・考え方が身につくことを目指している。

具体例として、小学校3年社会科番組「このまちリサーチ」を紹介。スーパーマーケットの売場の工夫を題材に、驚きや発見を演出で強調し、主体的な探究へとつなげている。

番組活用については、ストーリーとして理解しながら視聴し、心に残った気づきを学びの起点としてほしいと述べられた。公開授業では、番組視聴後に多様な意見や発見が生まれ、それが次の探究的な学習へと発展していた。

NHK for School には約8,000本の動画コンテンツがあり、テーマや視点ごとに動画を選択できる仕組みを整備。一人一台端末を活用し、子どもが自ら選び、調べ、共有する主体的な学びを支えている。

公開授業 1

小学3年 国語「道具のひみつをつたえよう」

授業者 熊本市立白山小学校
教諭 前田 和樹



使用コンテンツ コノマチ★リサーチ
「生活道具のうつり変わり」

授業研究会



本授業研究会では、小学校3年国語「道具の秘密を調べて伝える」単元導入における、NHK for School 動画活用の在り方について協議が行われた。

授業では、映像を通して昔の道具や暮らしを具体的に捉えさせ、児童の興味関心を喚起し、探究活動への意欲を高めることがねらいとされた。

研究協議では、動画視聴を複数回設定することの有効性や、観点を事前に与えるか、視聴後に立ち上げるかについて意見が交わされた。また、一斉視聴による気づきの共有や、選択視聴による主体的な学びの可能性が確認された。

指導助言では、放送教育は事実理解にとどまらず、映像によって心を動かし、語り合いを通して学びを深めることが重要であると示され、「書かせる」学習から「伝えたくて書く」学習への転換の意義が強調された。

公開授業 2

小学5年 総合「見つめよう、わたしたちのまち」

授業者 熊本市立楡木小学校
教諭 高山 直也



使用コンテンツ NHK for School
「SDGs17の目標別動画クリップ」

授業研究会



本授業研究会では、Canva を活用した小学校5年生のプレゼンテーション学習の実践を通して、授業設計・評価・ICT 活用の在り方について協議した。

授業では、相手意識を重視した表現力の育成をねらい、共同編集による資料作成や「プレチェン」（発表内容を観点に基づいて相互に確認・助言し、改善につなげる活動）を用いた相互助言を行った。

一方で、観点を広く設定しすぎたことによる時間不足や、評価基準の段階化が不十分であった点が課題として挙げられた。

また、聞き手の役割分担により視線や相互作用が弱まる場面も見られ、聞き手指導の必要性が確認された。

今後は観点の焦点化、ループリックの明確化、聞き手行動の指導を進めるとともに、生成 AI やデジタルツールを思考支援として位置づけ、より質の高い表現活動へとつなげていく方向性が共有された。

公開授業 3

中学3年 道徳「おくれてきた客」

授業者 熊本大学教育学部附属中学校
教諭 福田 晃平



授業研究会



本授業研究会では、中学校3年生道徳科において、NHK for School 教材を活用した探究的対話の授業実践が報告された。

授業では「自他の幸福」を主軸に、正解のない問いを設定し、対話モデルを用いて多面的・多角的に考える力の育成をねらった。

生徒は立場の異なる考えに触れながら意見を交流し、ルールの大切さを踏まえつつ、自己と他者の幸福を両立させる行動の在り方について思考を深めていた。

協議では、対話モデルが道徳科に限らず全教科で活用されている学校全体の研究の蓄積が、生徒の思考の深まりを支えている点が評価された。

また、NHK 教材は問いを生み出す構成に優れ、探究的な学びを促進する有効な教材であることが確認された。

今後は、道徳の時間にとどまらず、他教科と関連づけながら対話を重ねることで、より豊かな価値判断力の育成につなげていく方向性が共有された。

公開授業および授業研究会総括

本大会では、小学校3年生・5年生・中学校の3つの授業実践を通して、NHK for Schoolを活用した放送教育と情報活用能力育成の可能性について協議が行われた。

各校種に共通して、映像教材を単なる情報提示にとどめず、思考や対話を促す起点として位置づけている点が大きな成果であった。

小学校3年生の実践では、国語科の単元導入として動画を活用し、子どもの興味・関心を喚起しながら自由な気づきを引き出す設計が評価された。

一斉視聴、再視聴、選択視聴を組み合わせることで、探究への意欲が高まり、次時の調べ学習へ自然に接続していた。一方で、気づきを観点として整理・可視化する段階設計の重要性が課題として共有された。

小学校5年生の実践では、Canva を用いたプレゼンテーション学習を通して、相手意識を重視した表現力育成が図られていた。

共同編集や相互助言は有効であったが、観点設定の多さによる時間不足や評価基準の曖昧さが指摘され、観点の焦点化、ループリックの段階化、聞き手指導の必要性が明確になった。

生成 AI やデジタルツールを思考支援として位置づける方向性も確認された。

中学校の実践では、道徳科において「自他の幸福」を軸とした正解のない問いを設定し、対話モデルを用いた探究的な学びが展開された。

生徒は多面的・多角的に考え、価値判断を深めており、学校全体での対話的学習の蓄積が効果的に機能している点が高く評価された。

総じて、映像教材と対話を往還させながら「気づき→分類→一般化→表現」へとつなぐ学習プロセスが、校種を超えて有効であることが確認された。

今後は、評価や時間配分を含めた指導設計の精緻化を図りつつ、主体的・探究的な学びを継続的に深化させていくことが求められる。



熊本大会 参加者アンケート集約

1. 大会概要・回答状況

●回答数：41 件

教諭：22 名（約 54%） 校長：12 名（約 29%）

その他（主幹教諭・指導主事・企業等）：7 名（約 17%）

●参加形態：全日参加：27 名 午前のみ：6 名／午後のみ：8 名

2. 満足度（5 段階評価）

●午前の部（公開授業） 「5」評価が多数（全体・各分科会とも高評価）

●午後の部（全体会） 「5」：28 件 「4」：6 件

低評価はほぼ見られず → 全体として極めて高い満足度

3. 参加者の主な評価・成果（要約）

●大会運営

「運営が非常にスムーズ」「見えない配慮・準備に感謝」。
会場配置・時間構成が参加しやすい。

●公開授業・分科会

子ども同士の対話・主体的な学びが印象的

NHK for School を活用した授業が、単なる視聴に終わらず「問い」や
思考を生み出していた。

●講演・パネルディスカッション

次期学習指導要領の方向性が明確になった。

「初発の思考」「探究的な学び」「情報活用能力の段階的育成」への
理解が深まった。

●NHK for School プレゼンテーション

制作者の意図を知ること、授業での活用の幅が広がった。

長尺映像を含めた活用への意識変容が見られた。

4. 今後への示唆・期待

情報教育・放送教育は、教科横断的に学びを支える中核的存在。

映像は「見せる教材」ではなく、思考・対話・問いを生む媒介。

今後も、実践に基づく公開授業、制作者と現場をつなぐ機会の継続を期待する声が多い。

5. 総括

本大会は、授業実践・講演・パネルディスカッションを通して、次期学習
指導要領を見据えた「放送教育・情報教育の現在地と可能性」を、参加者が
自らの実践に引き寄せて捉える機会となった。

パネルディスカッション

テーマ 放送・情報教育が拓く、子どもの探求的な学びの未来



田中 秀喜

司会 NHK熊本放送局 アナウンサー

「放送と情報教育が、子どもたちの“問い”を生み出す入口になり得るのかを、今日は皆さんと一緒に考えていきたいと思います。」



堀田 博史

園田学園大学 こども学部 教授
文部科学省 学校DX戦略アドバイザー

「個別視聴だけで終わらせず、その後に対話が生まれる設計が、放送教育には求められています。」



安井 政樹

札幌国際大学 基盤教育部 准教授
日本教育メディア学会 AI時代の教育学会 多数

「『何がわかった？』ではなく、『どう思った？』と問うことが、対話を生み、学びを深めるエネルギーになります。」



小谷 拓

大阪市立大和川中学校 首席
大阪市学校教育ICT推進リーダー

「教師がすべて教えるのではなく、学びに伴走するファシリテーターになることが、これからの現場では求められています。」



山下 若菜

熊本市教育センター 教育情報班 指導主事
文部科学省学校DX戦略アドバイザーとしても活動。

「情報へのアクセスと、認知へのアクセス。その両方に困難を抱える子どもたちを支える力が、放送教育にはあります。」

総括

本パネルディスカッションでは、探究的な学びを支える放送教育と情報教育の役割について、多角的な議論が行われた。

情報活用能力の育成においては、単なるスキル習得にとどまらず、映像のリアリティを通して思考や感情を揺さぶることの重要性が共有された。

また、不登校や多様な背景を持つ子どもたちへの支援において、放送教育が情報・認知の両面から包摂的な学びを支える可能性が示された。

主体的・対話的で深い学びの実現には、個別最適な学びと集団での対話を往還させる設計が不可欠であり、放送はその共通体験の核となる。

初発の思考を促す質の高い映像コンテンツが、これからの教育を支える基盤であることが改めて確認された。

テーマ 探求的な活動を下支えする情報活用能力の育成 ～ICT・放送番組を通して～

講師

園田学園大学 こども学部教授

堀田 博史

本講演では、次期学習指導要領において重要な柱となる「探究的活動」と「情報活用能力」の在り方について、中央教育審議会ワーキンググループでの最新の議論状況を踏まえながら、その方向性と現場課題、今後の実装の見通しが示された。特に、探究活動と情報活用能力を切り離すのではなく、相互に補完し合う関係として位置付けることの重要性が強調された。

情報活用能力の現状については、全国調査の結果を基に具体的な課題が示された。キーボード入力速度の個人差は小学校高学年段階ですでに顕在化しており、中学校進学後の学習格差につながっていること、また、複数の情報を比較・分析する力についても、小学5年生の約半数、中学生でも過半数が十分に身に付いていない現状が明らかにされた。こうした状況を踏まえ、ローマ字学習開始時期の前倒しなど、基礎的スキル習得の在り方についても見直しが検討されている。

探究的学習の実装に関しては、教師主導から児童生徒主体へと段階的に移行する5つのパターンが提示され、単一の型に固定するのではなく、学習内容や発達段階に応じて柔軟に組み合わせる授業設計の必要性が示された。特に、自己調整学習の機会を意図的に組み込むことが、探究の質を高める鍵であるとされた。

今後の制度設計として、総合的な学習の時間に「情報の領域」を新設する構想も示された。情報スキルを集中的に学ぶ「情報ブロック」と、それを活用する「ミニ探究ユニット」を組み合わせることで、従来の総合学習と情報教育を相互に補完させる枠組みを目指すものである。さらに、小学校中学年から中学校までを見通した情報技術科の独立や、幼児教育との接続を意識した生活科への情報領域導入の必要性についても言及があった。

幼児教育との連携に関しては、「環境を通して行う教育」にデジタル環境を明確に位置付ける方針が示され、幼児期における自然な探究の芽生えを小学校教育につなげていく視点の重要性が共有された。小学校1年生は決して「ゼロスタート」ではなく、幼児期の経験を土台に学びを深めていくという認識が求められている。

あわせて、放送教育番組の役割についても触れられ、好奇心を喚起し、探究へと導く「初発の思考」を生み出す教材としての価値が再確認された。番組視聴後の問い返しや揺さぶりを通じて思考を深めること、短編と長編を適切に組み合わせる活用することの有効性が示され、NHK番組が探究的学習を支える重要な資源であることが強調された。

本講演は、制度設計と現場実践を往還しながら、幼児期から中学校段階まで切れ目のない情報活用能力育成を構築していく必要性を明確に示す内容であり、今後の教育実践と教材開発に向けた重要な示唆を与えるものであった。今後の学習指導要領の具体化に向け、学校現場と制度設計をつなぐ重要な視座を提示するものであった。



閉会行事・総括



第73回九州地方放送教育研究大会熊本大会は、放送教育九州大会として5年ぶりとなる集合開催を実現し、県内外から多くの参加者を迎えて無事閉会を迎えた。

午前は公開授業および授業研究会、午後はNHKによるプレゼンテーション、パネルディスカッション、記念講演と、一日を通して多角的な学びが展開された。

主催者を代表して挨拶に立った熊本県放送教育研究協議会 会長・坂口一成氏は、オンライン開催では得がたい「場の一体感」や「子ども同士、教師と子どもとの関係性」を直接感じられた意義の大きさを語った。

授業の空気感や細やかなやりとり、会場全体に生まれる緊張感と共有された時間は、対面開催ならではの学びであり、改めて“ライブ”の価値を実感する大会となったことが強調された。

また、各講師から示された内容は、放送教育・情報教育という枠を超え、これからの子どもとの向き合い方、育成の在り方そのものに深く関わるものであったと振り返られた。次期学習指導要領への言及や、2030年を見据えた現行の教育観に加え、さらにその先、2040年を見通した子どもたちの育成という視点が提示されたことは、参加者にとって大きな示唆となった。

多様性への配慮が求められる現代社会において、言葉や関わり方に細やかな気遣いが必要な場面は増えている。しかしそのような時代だからこそ、文部科学省が示す子ども像を踏まえ、教育の本質を見失うことなく、放送教育・情報教育を通して子どもたちの成長を支え続ける重要性が改めて確認された大会であった。

結びに、坂口会長は大会運営に携わった熊本県・熊本市情報教育研究会、九州地方放送教育研究協議会、NHK熊本放送局をはじめとする関係機関への感謝を述べるとともに、参加者の今後の健康と活躍を祈念し、盛会のうちに大会が閉じられたことを報告した。

【問い合わせ先】

第73回 九州地方放送教育研究大会 熊本大会
第20回 熊本県小・中学校情報教育研究大会 熊本市大会

熊本県放送教育研究会事務局

E-mail : kumamoto20251121@gmail.com